

愛を語らない

(2025年版)

作・郷原 玲

柴山亜伊

柴山鉄山

柴山春子

編集者 趙浩然

フミ(元妻)

福子

八百屋

そのほか

序章 月の光

本作は、大正から昭和初期に活躍した文豪、柴山鉄山の娘、柴山亜伊が、父について書いた自伝的小説『父・柴山鉄山』を戯曲化したものである。

ドビュッシー『月の光』

舞台上には、本を持った語り手が多数。

衣装は主人公、亜伊以外は、モノトーンを基調とする。

語り手たち、本の頁を開き、

語り全員 『父・柴山鉄山』

8 夜中、ふと目覚めると、まだ起きている父と母の会話を聞くことがあった。

4 「もうまっぴらです」

亜伊 母の声が聞こえた。

6 父の反応は聞こえなかったが、気配から察するに、いつものように敷島を喫んでいるらしかった。

1 きまっつてしばらくして、父は飲みに出かけていくのだった。

4 父を訪ねて、家には多くの文化人がやってきたが、

8 時々、家に宇野千代さんが来ると、母はいつも宇野さんにうっとりで見惚れ、

4 「洋装がお似合いになりますのね」と言った。

7 「あなただっけきつとお似合いになりますわよ」

6 ある日、母は着物を脱ぎ捨てた。

- 8 「あれ、モダンガールね」
9 近所の人はそんな母をしげしげと眺めて笑ったが、
7 私はそんな母を、確かに美しいと思った。
垂伊 やがて、母は家を出た。
2 母が家を出た日、
5 父は、縁側で月を見ながら、やはり、敷島を喫んでいた。

以降、演技エリアの後ろには常に語り手がおり、物語は登場人物の会話とそこに挿入される語りによって紡がれていく。
また、効果音なども語り手によって挿入される。

第1章 作家の条件 書こうと思う

亜伊、サスの中で。

亜伊 あ、読んでいただけましたか。——はい。あ、ありがとうございます。——あ、なるほど。はい。はい。はい。——はい。なるほど、確かに、そういう面は否定できないですけど。あの、でも、まだ、いくらでもまだ直し、入れられますから。あの、直したら、また、読んでいただけますか。いや、必ずもっと良いものにしますから。あの、ちよつと……!

亜伊、ため息をつき。

亜伊 ああ、ダメか。クソ。エラっそうに。

亜伊、ぶつぶつ言いながら踵を返し、

5 柴山亜伊。大正から昭和初期に活躍した文豪 柴山鉄山の娘である。

8 女学校にあがったころから、私は当然のように書き物をするようになっていた。

亜伊 こつちが下手にやりや、これだよ、糞。編集者ってのは何で、ああ、上から目線なんだ。

亜伊、女学校で。

亜伊 糞。どこが駄目なんだ。チクショー。よし、次の授業まで。

亜伊、原稿用紙を広げ、また、書き始める。

4 女学校の講義室で、時間の隙間を見つけては原稿用紙に思いを書き殴った。

と、福子に話しかけられる。

福子 あのう、

亜伊 は？はい。

福子 柴山亜伊さん、ですか。

亜伊 はい。

福子 私、隣の組の松浦福子です。

亜伊 あ、どうも、

福子 あの、もしかして、作家の柴山鉄山先生の、ご息女でいらっしゃる。

亜伊 え、ええ、ま、まあ。

福子 まあー！ なんとということでしょう。わたくし、鉄山先生のファンですの。

亜伊 あ、そうっすか。

福子 この前の発表されました、『断崖』、もう夢中になって読みましたわ。

亜伊 ああ、崖から落ちて心中する奴っすか。家族としてはカンベンして欲しいっす。

福子 私も、あんな美しい姿で最期を迎えられたらなって。私も死んでみたいわ、鉄山先生みたいに。

亜伊 あ、死んでませんけどね、父、

福子 鉄山先生の魅力は、なんと言ってもあの屑っぶり。羨ましいわ。あの屑が、お父様だなんて。

亜伊 あ、はは。

福子 お金にだらしない。酒にだらしない。女にだらしない。素晴らしいお父様ね。

亜伊 いや、あんまり話さないんで。あの人とは、

福子 今日、遊びに行ってもよろしくて？ 実は、シェイクスピアの翻訳の宿題を出されているの。お父様に、手伝ってもらったら、きつとできるわ。

亜伊 え。

福子 ねね、今から行ってもよいでしょう？ だって、お友達でしょう？

5 厚かましくも、福子は我が家に押しかけて来た。

8 私は、家に父がいないことを一心に祈ったが、果たして、

4 父は居た。

場面変わって、鉄山の書齋のもとへ亜伊を福子。

薄暗い書齋に鉄山の姿が浮かび上がる。

なお、鉄山は生身の役者では演じられず、コロスの持つハットのみによって登場する。セリフもコロスによる。

福子 あの、私、亜伊さんの親友の松浦福子と申します！

亜伊 え、親友？

鉄山 ほう、福子、良い名ですね。

福子 あ、ありがとうございます！

鉄山 福寿草の福か。

福子 は、はい。

鉄山 福寿草は、雪の中で花を咲かせて、春を告げる。素敵な名前だね。

福子 まあ、なんと！私の名前を、花に喩えてくださるなんて！あの、実は、シェイクスピアの翻訳をしなくてはいけなくて、

鉄山 どれ、見せてごらん。

福子、鉄山の隣へ。

5 私は、まるで小鹿のようにか弱い素振りで父の元にすり寄っていく福子の、なんとも白々しい態度を浅ましく思い、
8 そしてまた、いかにも寛容然とした紳士の振る舞いで目尻を下げる父を見て、心底、気分が悪くなった。

語りたち、頁をめくり、

亜伊 これは、娘と言う最も手厳しい筆からの、

全員 文豪 柴山鉄山の論評である。

4 私の父、柴山鉄山は、控えめに言ってもロクデナシであった。

亜伊 酒、

9 女、

5 借金、

3 酒、

6 酒、

1 不倫、

8 そしてまた借金！

4 当時、目黒にあった私の家には、昔から、多くの文人たちが出入りしていた。
5 夜中にやってきて乱痴気騒ぎするその一群が、私はイヤでたまらなかった。

場面変わって、飲み屋にて。

1 はい、みなさーん、二次会は、柴山鉄山先生のご自宅でございませう。
仲間たち うえーい。

仲間たち酔っぱらいながら移動して、芝山邸にて。

9 ガラガラ、お邪魔いたしましたませう。

8 いや、ところでおめえよ。「I love you.」を何と訳す？

9 「愛しています」

8 日本人が、そんな言い方をするわけがないだろう。もっと奥ゆかしくだ。漱石先生は、これを「月が綺麗ですね」と訳した。
全員 さすがは漱石先生。

8 さあ、どうやって訳す。

1 はい、

8 お前。

1 「あなたがお菓子だとしたら、頭から食べちゃいたい」

8 なんかも、ちょっと気持ち悪いけど、いいよ。龍ちゃん。で、お前は。

9 : 僕なんか、あなたを好きとか言う資格はないです。恥の多い人生を送ってきましたから。生まれてきてすみません。

8 暗いよ！ 暗いよ！ 治ちゃん。I LOVE YOU. だよ。どう訳すか。

5 はい、

8 お前。

? (愛の言葉)、

全員、盛り上がる。

などと、一頻り盛り上がったところで、

1 はーい、じゃあ、皆さん、そろそろ、お開きでございませう。

3 うーい、帰ろ、帰ろ。

9 おじゃまいたしましたー。

4 お、これはこれは、鉄山先生の奥様、おじゃまいたしました。

全員 おじゃまいたしました。

仲間たち、去っていく。

宴の後。食器などを片づける春子。

そこに、亜伊。

春子 今日も、盛り上がってらしたわね。

亜伊 ……

春子、宴の片づけをしている。

春子 亜伊さんも、早くお休みになって。子供がこんな時間まで起きてしまっていてはいけませんよ。

春子、片づけをしている。

亜伊 うるさくて眠れないし。

春子 そうですね。おやすみなさい。
亜伊 おやすみなさい。お母さん。

春子、去るかに見えて。

春子 亜伊さん。無理して、私のことお母さんって呼ばなくてもよいのよ。

春子、去る。

- 5 あの時の、春子さんのなんとも困ったような笑顔を、幼心に覚えている。
- 4 春子さんは、父の二番目の奥さん。つまり私にとっては継母ということになる。
- 7 家庭が複雑、と言えはその通りかもしれないが、
- 5 実は、私はその複雑な家庭の成り立ちを良く理解している。
- 6 というのも、父の書いた文章を読めば、私は父の恋愛遍歴を、ほぼ過不足なく把握できてしまうのだ。
- 9 父は、若い頃、鷗外に心酔していた。

ここから、鉄山のエピソードを再現する場面が続く。

- 8 折も折、私の母が父を捨てて家を出て行ってしまった後、父は浅草、浅草寺近くの裏路地で涙に濡れる貧しい女を目撃する。
- 4 鷗外にかぶれていた父が、彼女を見初めてしまったのは、無理なからぬことだったのかもしれない。
- 7 父、曰く。
- 1 「余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。鬢の毛の解けてかゝりたる、その美しき、いちらしき姿は、我が脳髓を射たり」
亜伊 うわ、気持ちわるい！
- 5 思春期の娘にとって、父親の情欲ほど気持ち悪いものはない。
- 亜伊 しかし、春子さんと再婚してからも、父は、数多の事件を起こした。
- 8 ある時は、ある文豪の妻と不倫関係に陥り、
鉄山どこまでも落ちてゆく。
- 不倫相手(5) はー！
- 7 二人は、旅館で睡眠薬を飲んで心中事件を起こす。
- 4 幸い仲居さんに見つかって、命を取り留めた。
- 仲居さん(8) いやー！吐いて吐いて！
- 亜伊 いや、何やってんの？
- 7 ある時は、カフェーの女給のもとに通いつめ、
カフェーの女給(3) ご主人様のコーヒー、おいしくなあれ。

鉄山 死のう！

3 はい！

8 しかもその一部始終を仔細に書き記して世間に発表するからまたタチが悪い。

亜伊 もう、ホントやめて。

1 「余は、全てを書く、余すところなく、隅から隅に至るまで」

4 これが父 文豪柴山鉄山のモットーだったからだ。

5 しかし家族にとってはたまらない。

亜伊 ああ、一刻も早く、この家を、出たい。

2 だから、私は、

8 小説を一発当てて、

語り全員 この家を出てやるんだ。

場面転換。

食事をしている。ちゃぶ台を囲んで、三人。

*

4 ある、年の瀬の迫った日の出来事である。

沈黙の中、食器や箸の音が響く。

やがて春子、息を吐いて箸を置く。意を決して、

春子 この前、鉄山さんの着物から、こんなものが出てきました。マッチです。新宿のバーの。また、印税を飲んでしまったんですか。この前、金貸しの人が出てきて、お金を返してくれと言ってきました。少し、控えていただけませんか。私も、節約しているんですが、

鉄山 凍死が一番、良い死に方だと思いが、どう思う。

春子 え？

鉄山 轢死は悲惨だからね。水死もあればいかん。

春子 鉄山さん。

鉄山 凍死が、やはり一番美しいな。

鉄山、席を立つ。

春子 鉄山さん。

春子の声を背に、去っていく鉄山。

「亜伊、箸を置いて立ち上がり、去るかに見えて振り返り、

亜伊 なに言ったって無駄でしょ。あの人に。

春子 そう言わないの。あ、亜伊さん、このあと、八百屋さん行って、買い物して来て下さらない。

春子、去る。

亜伊、春子の後姿を見ながら、

5 あの女も、何が嬉しくて、あの男と住んでいるのか。

と、そこへ家を訪れた編集者。

編集者 ごめんください。

亜伊 はい。

5 この人は、父の担当編集者の趙浩然さん。

6 中国人でありながら、日本の出版社で働いている。

編集者 あら、亜伊さん、こんにちは。お父さん、いるかな。

8 日本語が超絶うまい。

亜伊 さつき、でかけたみたいですけど。

編集者 ええ。(中国語でまくし立てる)

4 時々、中国語になる。

亜伊 あ、あの、日本語でお願いします。

編集者 …あの、先生、書けているみたいですかね。

亜伊 え？

編集者 ほらー、小説ですよー、

亜伊 いや、さあ、

編集者 困ってるんですよ。締め切り、先月までだったんですけど。

亜伊 そんなこと、私に言われても、

編集者 あの、亜伊さん、ちょっと、見てきてもらえませんか。

亜伊 は？

編集者 書斎です。きつとあるはずだと思っんですよ、原稿が。お願いしますよ。

亜伊 仕事場に立ち入っちゃいけないことになってるんです。

編集者 それは私もですよ。でも、ご家族なら、まだ。お願いします！
亜伊 ……分かりました。
編集者 ありがとうございます！

亜伊、仕事場に入っていく。
薄暗い書斎。

亜伊 うわ、汚っ。

4 父の書斎。

5 足の踏み場もない乱雑な部屋に足を踏み入れると、

7 染みついた煙草の匂いが鼻をついた。

8 部屋は、

7 キン、

4 と冷え切っていた。

亜伊、物を避けながら入っていく。

亜伊、書斎の机の引き出しに手をかけ、

亜伊 ん。

5 引き出しには、鍵がかかっている。

亜伊 あ、

亜伊、机の上に、原稿を見つける。亜伊、編集者のもとに戻り。

亜伊 原稿用紙、ありましたけど、白紙でした。

編集者 え？ 何ですか？

亜伊 ああ、タイトル、ありました。『福寿草』

編集者 タイトルだけですか？（中国語で何か言う）。いやあ、困るなあ。まあ、いつものことと言えばいつものことなただけ。わかりました。ありがとう。

編集者、去る。

亜伊 あ、八百屋行かなきゃ。

亜伊、外に出ると木枯らし、

亜伊 寒っ。

八百屋へ。

八百屋 へい、らっしやい。お、鉄山先生のごのお嬢ちゃん。今日は、何を、

亜伊 あの、ネギとホウレンソウを。

八百屋 はいよ、オマケしとくよ。

亜伊 ありがとう。

と、そこへ福子。

福子 あらー、亜伊ちゃん。

亜伊 あ、福子さん。

福子 なにー、どうしたのー。浮かない顔。私たち、お友達じゃない。もっと喜んでよ、出会いを。

亜伊 ああ、うん、

福子 この前はありがとう。柴山先生、本当に素敵。私のこと、お花に喩えて、

亜伊 ああ、福寿草。

福子 きゃあ。

悶える福子。それを見て呆れる亜伊。

亜伊 ……福寿草

福子 きゃあ。

と、突然、福子、真剣な面持ちで、

福子 ……あのき、

亜伊 ん？

福子 ナス。

亜伊 はい？

福子 ナスって、どこにあるのかな。

亜伊 あ、ナス。

八百屋 へい、ナス？あ、いや、ナスはこの季節にはちょっと。

亜伊 あ、そうですよね。

福子 …… 亜伊ちゃん、私たち、

亜伊 え？

福子 …… もう、友達じゃ、いられないかも。

亜伊 は？

福子 じゃあね。

福子、去っていく。亜伊、呆気にとられて、

八百屋 鉄山先生は、達者かい。

亜伊 あ、まあ。

八百屋 この前の小説、売れてるらしいじゃないかい。崖から落ちて心中する奴。

亜伊 そうらしいですね。

八百屋 亜伊ちゃんも、お父さんの血を受け継いで、将来は女流作家かな？

亜伊 いや、それはどうでしょう。

八百屋 血は争えないからね。まいどあり。

亜伊、家に帰り。

春子 ありがとう。もうすぐ、鉄山さん、帰ってくる頃かしら。

春子、去る。亜伊、自分の部屋へ。

亜伊 血は争えない。…あー、くそ。

亜伊、小説を書くが、そのまま寝てしまう。

しばらく時が流れる。

外は雪か。静かである。

と、そこへ、春子、慌てた様子で亜伊のもとへ。

春子 亜伊さん、亜伊さん、

亜伊、眠たそうに起き上がり、

亜伊 え？

春子 帰ってこないの。…鉄山さん。また、どこかで身を投げてるんじゃないかと思って。

亜伊 またあ？

春子 この前、凍死がいつって、言ってたのが気になって。今度は、雪山で遭難するんじゃないかしら。氷の中で凍死。

亜伊 今度はどこの女。

春子 あの人、小説が書けないと、すぐに死のうとするから、

亜伊 次の小説、ね。…あ、

亜伊、思い出して、

亜伊 『福寿草』

4 『福寿草』

亜伊 次の小説のタイトル。

1 福、

5 福？

3 福？

6 福？

9 福、、子。

亜伊 福子。えー!!(気づいて)あ、あ、…あの、女。

春子 何？何？

亜伊 ごめん、まだ悪い夢から覚めてないみたい。

春子 どういうこと？

亜伊 あのさ、娘の同級生と心中しようとする男、どう思う？

春子 え？え？

亜伊 死んだ方がいい。…寝るわ。

春子 ちよつと待って、どういうこと？

亜伊 雪山で遭難。氷の世界に閉ざされる二人。その氷の中で咲く、福寿草。ああ、ストーリーが見えたわ。

春子 どこ、どこの。どこに行ったのかしら。

亜伊 さあ、どこでしょうか。あ、…ナス。

春子 ナス？

亜伊 ナスだ。…野菜じゃなくて、栃木的那須。

春子 …行きましょう。

亜伊 ええ？ やだよう。

春子 荷物まとめて、すぐに！

亜伊と春子の搜索活動。

6 私たちは夜行列車に飛び乗って栃木県那須塩原に向かった。

栃木への道のり。

9 どうにか辿りつくくと、すぐに二人の足取りは掴めた。

旅館の人(4) ああ、その人たちならね、昨晚泊まって、夜が明ける前に出ていったよ。そりゃあ、男と女だからね、雪山で心中するなんてことも考えたけども。ほれ、あの山、ちょうど漢字の山みたいな形。ここから足跡、ちょうど二つ残されてるでしょう。

春子 行きましょう！

旅館の人(4) 気をつけねっと、遭難するっぺよ。

亜伊と春子、雪山を登っていく。

やがて、吹雪の中、場面、鉄山と、その傍らに福子。

亜伊 あー、いた！

春子 鉄山さん！

二人、駆け寄って、

春子 まだ、生きてる。なんとかかしなきゃ。

亜伊 死にぞこない、ほっとけばいいんじゃない。

春子 そんなこと言わないで、何か、温めるもの。

亜伊 ないよ、雪山に！

春子 温めるもの、温めるもの、あ、

亜伊 え？

春子、マッチを取り出す。

春子 新宿のバーのマッチ。

亜伊 マッチ売りの少女じゃあるまいに。

春子 何か、燃やすもの！

亜伊 ないよ。
春子 あるでしょう！ 何か！ いらぬ紙とか。
亜伊 あ、

亜伊、持っていたカバンを開ける。
大量の紙を取り出す。

春子 ちよんどのいい紙、持ってるじゃない。

春子、紙を奪い取り、

亜伊 それ、私の原稿、

春子、紙を受け取り火をつける。

4 しゅぽ、
3 ぶわー。
8 メラ、
6 メラメラ
5 パチパチ。

火が燃える。

春子 もうすぐ救助隊が来るわ。それまで、ここで待ちましよう。

1 その日、
5 継母と、
6 父と
4 父の不倫相手と、そして私は、一つの火を囲んで夜が明けるのを待った。
8 私の小説の処女作は、那須塩原の雪山の中で灰となって消えていった。
5 この、ろくでなしの父のせいだ。出てってやる。
語り全頁 こんな家、絶対に出ていってやる。
3 メラ、
9 メラメラ、
6 パチパチ、

亜伊、火で温まりながら、

亜伊 ……うおー、あつたけー…。

暗転。

第2章 作家の条件 恋をする

新聞を読む人々。

- 4 お騒がせ作家柴山鉄山。また心中未遂。
- 9 那須塩原温泉に、女学生と逃避行。
- 8 山中にて、地元住民に発見さる。

編集者のもとへ新聞記者たち。

- 9 今回の騒動に鉄山先生は何と、
編集者 柴山は「お騒がせて申し訳ありません」と。
- 1 相手の女性のご家族に一言。
編集者 「申し訳ありません」と申しておりました。
- 6 今回、心中を試みようとした動機はなんでしょう。
編集者 あ、ですね、このことに関しては、柴山の小説にて詳しく書いていきたいと思いますので、そちらをご覧ください。
- 8 相手の女性とはまだ続いているんですか。
編集者 それについても、また小説の中で、
- 5 心中事件を幾度となく繰り返しているような印象ですが、
- 7 もしかして、本当は死ぬつもりなんてないんじゃないですか。
編集者 それではこれで、

鉄山、記者たちに囲まれながら去る。

*

亜伊、小説を読んでいる。
横にはヤギ。

ヤギ(8) メエエエエ
亜伊 おお、ヤギのメエ子。見ろ、これが、親父の新作だって。

物語の中。

福子 「鉄山先生、あなたへの思いを私は抑えきれません」

鉄山 「いかんよ、君。君はまだ若い」

福子 「いいんです」

鉄山 「分かった。ならば、私たちの愛を、美しいまま留めておこうじゃないか」ザク、ザク、ザク(雪山に入る)
二人 あーれー

6 雪原を転げ落ち、気を失った二人のもとに救助隊が駆け付け、

4 二人は命を取り留めることになる。

亜伊 って、助けた俺たち、ぜんぜん、でてこねーじゃねーかよ!!

ヤギ(8) メエエエエ。

亜伊 なあ、メエ子。こんな小説どこがいいんだい？

ヤギ(8) メエエエエ。

亜伊 もっと私は、純粋な文学を書く。

とそこへ、編集者。

編集者 いやあ、亜伊さん。

亜伊 あ、どうも。

編集者 はっはっは。なんか、いろいろありがとうね。

亜伊 ご機嫌ですね。

編集者 いやあ、これで、編集としては、しばらくは安泰だからね。

亜伊 家族はたまらないですけど。

編集者 鉄山先生は。

亜伊 さすがに反省しているらしいけど。もう、二度と心中はしないって。

編集者 鉄山先生はいつも言っている。「作家は全てを書かなくてはならない。余すところなく、隅から隅に至るまで」。己の生きざまを、全てをさらけ出すのが、鉄山先生の作品だ。

亜伊 くだらん中年オヤジの羞恥プレイですよ、こんなの。私なら、もちっとまともな小説を書きますわ。

編集者 あ、君も、書いてるんだ。さすがは文豪の娘。

亜伊 いや。早く家を出たくて。

編集者 書いたら読ませてくれよ。あ、一つだけ、アドバイスをしておこう。

亜伊 はい。

編集者 恋をするといい。

亜伊 え？

編集者 物書きは恋をしなくてはね。

編集者、真剣な眼差しで、

編集者 死ぬほどの恋を。

亜伊 恋、

編集者 じゃ。

4 きらーん。

編集者、去る。

亜伊 何、この感じ。あ……。恋、か。

ヤギ(8) メエエエ、

亜伊、堰を切ったように何かを書き始める。

歩きながらも原稿用紙に文字を書き連ねている。

やがて八百屋の前で、

八百屋 やあ、亜伊ちゃん。

亜伊 ああ、八百屋さん。

八百屋 やっぱり、物書きかい？

亜伊 ええ、ああ、まあ。

八百屋 うちはね、娘が嫁に出ていっちゃって寂しくってね。

亜伊 ああ、そうですか。ん？するってえと何ですかい、八百屋さん。

八百屋 急に江戸弁になったね。

亜伊 結婚すると、家を出られるんですかい？

八百屋 そりゃ、そうだろうよ。

亜伊 ははあ、そうですか。なるほど。ふむふむ。

亜伊、鼻歌を歌いながら去る。

八百屋、亜伊の後姿を見ながら、

八百屋 ありゃあ、なんだか亜伊ちゃん、だんだんお父さんに似てきたような。

亜伊、そしてまた同じ場所で、原稿を書いている。

編集者 やあ、また会ったね。
亜伊 ……

亜伊、夢中で書いている。編集者、近くで見守る。

亜伊 ……よし、っと。

編集者、静かに拍手。

編集者 おめでどう。

亜伊 え。

編集者 作家にとつて、筆をおく瞬間は最も祝うべき瞬間だ。読ませてくれるね。

亜伊 あの、感謝しているんです。

編集者 ええ？

亜伊 この前、アドバイスしてもらって。おかげで、書ききることができました。まだ、推敲してないんですけど。

編集者 もしもここに、スノウで修正した画像と、そのままの写真があったとする。そしたら僕は、間違いなく、後者を観たいね。

亜伊 喩えが、よくわかんないですけど。

亜伊、原稿を差し出す。

編集者、原稿を受け取り、その場で読み始める。

原稿を読みながら、

編集者 ねえ、君のお父さん、鉄山先生って、どんな人。教えてほしいな。

亜伊 いや、まあ、言いにくいですけど、もう、とにかく嫌いで。軽蔑してるっていうか。あ、でも、ただの反抗期とかじゃないと思います。
まあ、あの通り、人として最低ですから。

と編集者、突然、原稿を持つ手が震え始める。

8 「人として最低」と、私がそこまで言った時、

6 彼は突然、私の原稿を握りしめたまま、興奮して言うのだった。

編集者 亜伊…、さん。

亜伊 は、はい、なんでしよう。

編集者 お父さんに、お父さんに、会いに行こう。

亜伊 え。

編集者 お父さんに、話したいことがあるんだ。

亜伊 あ、あのそれはどういう意味で、

編集者 意味なんかいいんだ。とにかく、お父さんと話がしたい。

亜伊 あの、私の小説は、

編集者 その話はあとだ。これから、ひよっとしたら、いつでも会えるようになるかもしれないじゃないか。

亜伊 え？

編集者 だって、僕たち家族になるかも……。いや、気が早かったね。ごめん。まだ、恋、だから。

亜伊 え……。あ、じゃ、じゃあ、家、行きます？

編集者、頷き、黙って歩いて行く。

それに続く、亜伊。

ゆっくりと日が暮れていく。

4 私は、彼の背中を追いかけて歩いた。

亜伊 あの、これは、一体、どういう……

8 あれ、これは、

5 これはもしかして、

1 ちよっと待てよ？あいつは中国人だぞ？

6 国際結婚だ。

8 でもあの人と付き合えば、早くデビューできるんじゃないの？

2 薄目で見ればイケメンかも！

などと盛り上がる Kors たち。

編集者、突然、立ち止まって。

編集者 亜伊さん。やっぱり、お父さんに会う前に、君に、伝えておこうと思う。

亜伊 は、はい。

編集者 僕は、お父さんに伝えようと思うんだ。

亜伊 は、はい。

編集者 僕は、恋をしているんだ。

16 ごくり

編集者 僕は、出会ってしまった。素晴らしい才能に。いや、才能に恋をしているんじゃない。才能を持っているその人に、僕は恋をしているんだ。

8 おっと？

編集者 これは、命をかけた恋だ。僕は、この恋のためなら死んだって構わない。そう、心中したって構わない。124 き、来た。

編集者 亜伊さん、

全員 はい。

編集者 はつきり言おう。僕は、僕は恋をしているんだ。君の、お父さんに。

全員 はい。

間。

語り全員 え？

編集者 好きだ。僕は、僕は、柴山鉄山を愛している！

亜伊 えー。

編集者 うわあ、言っちゃった。恥ずかしい。

亜伊 あ、あの、す、すみません。あの、好きって言うのは、その、つまり、男として、っていうか、

編集者 はい！（きっぱり）

亜伊 あ、あははは、あの、じゃあ、私の小説は、

編集者 どうでもいい。だって、興味ないもの。

亜伊 えー、

編集者 ちょっとだけ読ませてもらった。まー、なんだな。なんて言うか、少女漫画の真似事って言うかね。鉄山先生の小説、読んでみたらよ。君も、鉄山先生の娘なんだから、もっと、文学の神髄を学ぶべきだ。あ、ごめん。思わず、鉄山先生への愛が溢れ出て、厳しいことを言っちゃったかな。

亜伊 いや、いいです…。素直な感想、ありがとうございます…。

編集者（興奮して中国語でまくしたてる。「いや、君の話を聞いていたら、鉄山先生への思いがこみ上げてきて。人として最低。いや、最高の誉め言葉だよ」などと）

と、そこへ鉄山。酔っぱらっている。

鉄山 どうした。家の前で。

編集者 て、鉄山先生!! 鉄山先生、お話が!!

鉄山 おお。ま、上がり給え。

編集者 はい!! 先生、私は、先生となら、死んでも構いません!!

編集者と鉄山、去っていく。

亜伊 あれえ。

5 これから、二人がどうなったかは、語り全頁 読者のご想像にお任せしよう。編集者 鉄山先生—!!

亜伊、一人残されて。

そこへ、ヤギ。

亜伊 …あ、メエ子。

ヤギ メエエエ、

亜伊 ほれ、食え。

4 私の初めての恋愛小説は、

5 ヤギのメエ子のエサとなったのだった。

ヤギ メエエエ。

暗転。

第3章 作家の条件 己を知る

- 4 「柴山鉄山、今度は、男性編集者と心中事件」
- 8 「もはや、フリーラブに性別の壁もなし」
- 5 「ついでに国境の壁もなし」
- 7 まさかそつちも行けるとは。
- 9 よ、両刀使い。
- 1 しっかし、柴山鉄山、
全員 ゲスだねえ。

と、そこに亜伊。

三人、新聞記者になり、

- 新聞記者(4) 柴山亜伊さんですよ。
- 新聞記者(1) 柴山先生のご息女でいらっしゃる。
- 新聞記者(8) 今回の心中事件について一言、
亜伊 いや、私は、
- 新聞記者(5) 娘さんから見て、お父さんが、男色の気があったのはご存知でしたか、
- 新聞記者(6) 娘さんとしては、どのようなお気持ちでしょうか。
- 新聞記者(3) 娘さんも、もしかして、
- 新聞記者(5) 男と男との間の子どもとか、
- 亜伊 んなわけねーだろーが!!
- 新聞記者(7) 今、柴山先生は、
亜伊 何か、酒を飲んだ勢いだったそうで、反省して、もう酒は飲まないって言ってました。それじゃあ。

やんややんや。

やがて、セミの鳴くある口。

亜伊、家に帰ると、

春子、借金取りの前に土下座している。

借金取り(9) いやね、こつちも商売あがったりなんですよ。

春子 申し訳ありません。今、主人はかけておりました。

借金取り(1) 聞きましたよ。柴山先生、新宿で豪遊してらっしゃいますか。そんなお金あるんだったら、一円でも、二円でも、

返していただけませんかね。

借金取り(9) 新しい小説が売れて、お金はあるはずじゃないんですかい？

春子 あの、方々からお金を借りておるようでした、

借金取り(1) とにかく、今月中に耳をそろえて返してもらおうからね。

借金取り、出ていく。去り際、亜伊に、

借金取り(1) 全く。小説家ってのは、困った職業だねえ。

借金取り(9) お嬢ちゃんも、親父さんみたいになっちゃいけないよ。

借金取り、去っていく。

春子 あ、お帰りなさい。あの、鉄山さんね、もう二度と迷惑かけないって。あ、亜伊さん、郵便が届いてらしたわ。

春子、郵便を渡して去る。

セミの声。

亜伊、郵便を開いて、ハツとした。

場面転換。

編集者のもとに亜伊。編集者、激しく落ち込んでいる。

亜伊 こんにちは。

編集者 は、柴山先生のお嬢さん。

亜伊 名前で呼んでください。どうですか、ご気分は。敬愛する柴山鉄山の小説の題材に、自らがなったご感想をどうぞ。

編集者 それが、…それが先生、あれから、僕に会ってくれないんだ!!

亜伊 ダンにされたってどこですかね。

編集者 そんなはずはない。僕たちは、真実の愛を誓い合ったんだ。

亜伊 そうですか。…はい。

亜伊、万年筆を編集者に差し出す。

編集者 なんだいこれは。

亜伊 鉄山の愛用万年筆です。書斎からパクッてきました。

編集者 く、くれるのか！超お宝じゃないか！

亜伊 交換条件です。

編集者 え？

亜伊 私と、遠いところへ行きませんか。

ヒグラシの声とともに、夕刻へ。

場面、柴山邸。亜伊の部屋に春子。

春子 亜伊さん、亜伊さん？

春子、書置きを見つける。

春子 「探さないでください」…大変。

場面変わって、東京駅。

遠くから汽笛。

編集者のもとへ旅支度の亜伊。

亜伊 お待たせ。

編集者 なんとか、切符、二枚、取れたよ。

亜伊 じゃ、行きましょう。

編集者 本当に行くの？…会ってどうするの。

亜伊 お宝、欲しくないの？ 行くよ。

亜伊、颯爽と旅立つ。

重い車体を動かして機関車が出発。そして汽笛。

場面は宵闇に溶けていく。

5 「母に会いたい」

6 一日として、そう思わない日はなかった。

8 私は、手紙の送り方を覚えたその時から、

4 こっそりと母に手紙を送り続けていた。

9 母は、住所を転々として、いるらしく、

1 恐らくはその手紙は母の元には届いていなかったのだが、

7 ある日、親切な人が母の新しい住所を教えてくれたのだった。

5 そうしてようやく返事が来た。

二人、客車にて。
編集者が窓を開けると、列車の律動が車内に響き渡る。
風を感じた亜伊。

亜伊 ……なんか、いいね。

編集者 え？

亜伊 逃げるみたいな感じ。逃避行っていうか。ひよっとしたら、こういうのが、気持ちいいのかな。

編集者 ん？ 誰が？

亜伊 ……なんでも。

亜伊、車窓を眺めている。

やがて、二人、汽車を降りる。

場面。待ち合わせた駅前のレストラン。

編集者 (腕時計を見ながら) もうすぐかな。先に頼んでる？

亜伊 いや、いや。

と、そこへ客。フミである。

フミ お待たせ。

編集者と亜伊、立ち上がり、

編集者 こんにちは。わざわざありがとうございます。

亜伊 ……どうも、亜伊です。

亜伊、礼をするが、フミの姿を凝視してしまう。

フミ なあに？ 堅苦しいわね。そういうのは、抜きにしましょ。

二人、座る。

フミ もう頼んだ？

編集者 あ、まだです。

フミ あなた、あの人にそっくりね。

亜伊 ……

フミ もっと、私に似ているの想像してた。

亜伊 ……

編集者 あ、い、いや、お母さんにも似てますよ。やっぱり親子ですね。

フミ そう？ じゃ、どうしようかしら。すみません。

ウェイターが来ると、メニューを見ながら、

フミ コーヒーを、

編集者 あ、じゃあ、私は、紅茶を

フミ あなたは？ なんでも好きなもの、頼んでいいわよ。

亜伊 ……リンゴジュースを。

フミ ふん。リンゴジュース。子供ね。

間。

フミ あなた、今は？ 女学生？ 将来、どうするの？ まさか、作家になんてなるんじゃないでしょうね。やめてちょうだいよ。作家なんてのは、ろくなのがないから。

沈黙。

フミ 元気なの？ あの人は、

亜伊 ……毎日、飲んでます。

フミ そう。

場面、会話が凍りつく中、回想シーンへ。

8 私は急に、幼い頃の母の姿を思い出していった。

1 父は、毎晩のように外で飲んでしたが、

5 母も、同じく夜には出かけて行ったから、

3 私は一人で家にいることが多くなった。

8 ある夜、私は急激な悪寒に襲われて、居間で動けなくなりました。

7 深夜に帰ってきた母は、私を見つけて、
4 あなた熱があるじゃないの、
6 と不機嫌そうに言った。
4 全く、メンドクサイわね。
5 私は一度、母に連れられて、見知らぬ男の人と会ったことがある。
9 大学生の若い男だった。
6 私は、その男の前で女らしく笑う微笑む母が怖くて、ずっと下を向いていた。
7 父の小説によれば、母はその男と家を出ていった。
1 「全てを書く。余すところなく、隅から隅に至るまで」。
5 父の小説には、全てが書かれている。
フミ 私は、あれから結婚して。離婚して、もう一度、結婚して。言っておくけどね、私は全然、後悔していないから。私は後悔をしたことがない。これまで一度も。そしてこれからも。

フミ、席を立ち。

フミ それじゃ。

編集者 あの、今日はありがとうございました。

フミ ……あなた、本当に、あの人にそっくりね。

亜伊 ……

フミ そういうところが。本当に大事なことは決して口に出さない。ほんと、いやらなっちゃう。それじゃ。

フミ、去る。

二人、残される。

二人 ……

亜伊 ……わたし、ロクデナシと、ロクデナシの娘だったってことかな。

編集者 ……

沈黙。

亜伊 酒。

編集者 え？

亜伊 ……酒を持ってこーい!!

居酒屋にて。
亜伊、泥酔している。

亜伊 はい、くわんぱーい。

編集者 はい、はい。かんぱい。いや、亜伊さん。ちょっと飲みすぎですよ。

亜伊 何を言ってるんだお、オメはよ。

編集者 いや、こんなに飲んだら、帰りの列車のお金が。

亜伊 おい、オメ。I love you. をどう訳す。

編集者 え、あ、愛してます。

亜伊 ダメだな。オメはよ。日本人はそんな野暮な表現はしね。漱石先生は、これを、月が綺麗ですね、って訳した。オメは、どう訳すよ。

編集者 飲みすぎですよ。

亜伊 飲みすぎですよ、それがお前の、I love you.か。

編集者 違いますよ。じゃあ、亜伊さんは、どうやって訳すんだよ。

亜伊 死んじゃおっか。

編集者 ええ？

亜伊 死んじゃおう。

思いがけず真剣な眼差しの亜伊。

ドキリとする編集者。

と、そこへ、

春子 亜伊さん。

編集者と亜伊が振り返ると、そこには春子の姿があった。

編集者 あ、

亜伊 ん？

春子 何、やってるの。お酒なんて。あなたらしくない。

編集者 あ、あの、どうしてここに。

春子 なんだかわからないけど、家出を追跡する能力がついちゃったみたい。

亜伊、立ち上がり、

亜伊 なんだオメ。何しにきたんだ。

亜伊、春子に詰め寄り、

亜伊　なんでオメがここにいるんだ。ええ？あの、クソみたいな男と一緒に暮らして、クソみたいな男とクソみたいな女の娘の面倒見て。
なんなんだオメ。おいオメ、I Love you.は…、
春子　帰りましょう。

春子、まっすぐと。

亜伊　ん？おめ、オメのI Love you.は、
春子　帰りましょう。辛かったんでしょう。分かります。帰りましょう。

春子、どこまでもまっすぐと亜伊を見つめる。

亜伊　それが、…それが、オメの。…オメ、I Love you.か…ロンチキショー！

亜伊、感情を抑えきれず、泣き出す。嗚咽。

8 春子さんの「帰りましょう」を聞いたとき、

4 なんだか多くのがこみあげてきた。

5 こみあげてきたのは、感情だけではなかった。

亜伊　う、う、
全員　！

亜伊　おええええええー

亜伊、吐く。

春子　きゃあ、大変、

編集者　ゲロだ！

春子　拭かなきゃ。

編集者　なんか、拭くもの、拭くもの。あ、こんなところにたくさんの紙が、
全員　拭いて、拭いて！

4 そのどうでもいい紙で早く拭いて！

春子と編集者、亜伊の原稿で床を拭く。

亜伊 ういー、それ…、私の原稿。…ういー。

ゲロをめぐって大騒ぎの人々の中、鉄山の万年筆をそっと懐に忍ばせる編集者であった。

第4章 作家の条件

凡てを書く。若しくは、凡てを書かない事。

荷物をまとめている、亜伊。
そしてそこに春子。

春子 本当に、出ていくの。

亜伊 出ていくって、そんな大げさなものじゃ。八百屋さんの二階、娘さんが嫁いじやったから、部屋が空いているんだって。ちょっと下宿させてもらうだけです。

春子 ウチにいても、何にも構わないのよ。

亜伊 いや、この家は、ちょっと。それじゃ。

亜伊、カバンを持って旅立つ。

亜伊 お世話になります。

八百屋 あいよ。自由に使ってください。

亜伊 お店、手伝いますんで。

八百屋 ま、ぼちぼちでいいよ。荷物置いてきな。

亜伊 はい。

亜伊、部屋を見回して、。

亜伊 あー、自由だー。

8 下宿をしてからの私の心は、まるで憑きものが取れたように軽くなった。

7 時々、八百屋の店番をして、

4 お客に愛想を振りまき、

6 夜は虫の声を聞きながら、静かに眠った。

5 こんな時間の過ごし方もあるのだと、初めて知った。

6 小説も、もうさっぱり書く気がしなくなった。

4 そんな折の事だった。

不意に場面、暗く。雨。
柴山邸。

父、寝ている。その横に春子。
亜伊がそこを訪れた。

亜伊 春子さん。
春子 あら、春子さん。

亜伊、腰を下ろす。

春子 一週間くらい前だったかしら、急に血を吐いてね。それからずっと、こんな感じ。お医者様が難しいんじゃないかって。ま、酒にタバコに不摂生してたから、仕方ないわね。

亜伊 そうですか。

春子 今、寝てるの。お茶入れるから。

亜伊 あ、あの、お構いなく。

春子、去る。

一人になった亜伊、寝ている父の姿を見た。

春子、戻ってきて、

春子 寝てるのときに来て正解。起きるとメンドクサイから。機嫌が悪くって。

春子、お茶を出す。鼻歌とか歌ってる。

亜伊 春子さんさ、なんか楽しそうだね。

春子 え？

亜伊 あ、いや、いい意味で。お父さん、病気の方が、楽しそう。

春子 人聞きの悪い。…でも、死のうとしている人に寄り添うより、生きようとしている人に寄り添う方が嬉しいものじゃない？ あんなに、死にたい死にたい言ってた人が、病気になったら、必死に生きようとしている。苦しがつて、助けて、助けてって。それが嬉しいのかも。

亜伊 さらっとすげえって言うてる。

二人、小さく笑う。

春子 だから、こっちは大丈夫だから、亜伊さんは好きにして。たまに見にきてくれるだけで十分だから。
亜伊 うん、じゃ。

亜伊、春子と別れ、帰ろうとする。
と、そこへ編集者。

編集者 亜伊さん。

亜伊 あら、どうしたんですか。

編集者 お父さん、あんなになっちゃってしまって。

亜伊 編集も、大変ですね。痛手ですか。

編集者 それはもちろん。：亜伊さんは、書いてないんですか。

亜伊 え？：私ですか。ええ、まあ。

編集者 書いた方がいい。

亜伊 え？ いや、でもだって、ほら。

編集者、亜伊の言葉を遮って、真剣な眼差しで、

編集者 君のお父さんはね、常々、こんなことを言っていた。「作家は、全てを書かなくてはならない。余すところなく、隅から隅に至るまで」

亜伊 はあ。

編集者 でもね、この言葉には続きがあるんだ。「そして、全て書き終わったあとに、まだ書いていない、残されるものがある」

亜伊 残されるもの。

編集者 「紙に円を描くには、二つの方法がある。一つは、安直に円を描くこと。そしてもう一つは、背景を塗りつぶして、空白の円を残すこと。作家がやるべきことは、紙を端から塗りつぶしていくことだ。そして、最後に空白が残る。その空白が、作家が生涯をかけて描いた円だ」

亜伊 はあ、

編集者 君も、全てを書くべきだ。心にあるもの。すべてだ。夜遅くにごめん。それが言いたくて。

亜伊 ……

亜伊、残されて。

亜伊 作家が死にそうなんで、後釜を見つげに来たか。

亜伊、物思いにふけりながら帰路。

- 8 私は、不意に幼い頃のことを思い出した。
- 7 父が珍しく活動写真など見に行こうと言い出したのでついていくと、
- 4 ちょうど『不思議の国のアリス』が来た時で、
- 1 映画館は大変な人だかりとなっていた。
- 5 人混みが嫌いな父は、行列に並ぼうともせずに、
- 6 見たいと泣く私を無理やりに連れて、そのまま家に帰ってしまった。
- 8 私の胸は、悲しみでいっぱいになった。
- 9 父はそのあと、家を出て、夕刻過ぎに戻ってきた。
- 4 そして私に、一冊の分厚い本を差し出した。
- 3 立派な装丁の本で、
- 2 表紙には、
- 7 懐中時計を見ながら急いで駆けていくウサギが描かれていた。
- 8 『不思議の国のアリス』
- 5 私は、その本を、何度も、何度も読んだ。

夜、亜伊、机に向かって書き始める。
書き物をしている亜伊のもとへ八百屋。

八百屋 亜伊ちゃん。

亜伊 はい。

八百屋 ああ、ごめんね。お客さん。

亜伊 お客さん？

八百屋 柴山先生。

亜伊 え？ 父？

八百屋 先生、ご病気だったんじゃ。

と、父の影。

八百屋 大丈夫ですか。へ、へい、そうですか。それじゃ。

八百屋、下がる。

亜伊と父 鉄山。

亜伊 ……何用ですか。

鉄山 ……

亜伊 お身体は大丈夫なんですか。

鉄山 ……

亜伊 勝手に家を抜け出てきたんですか。春子さんにまた叱られますよ。

鉄山、タバコを吸う。

亜伊 タバコなんかやめてください。

鉄山 ……

亜伊 なんなの！ 何しに来たの！

鉄山 ……

父、何も喋らない。

ドビュッシー『月の光』が静かに流れる。

亜伊 ……もう、ほんとヤダ。なんで黙ってるの。まあ、そうだよ。別に、言えることなんてないよ。別に謝ってほしいわけじゃない。謝って済む問題じゃないもんね？ 私が、どれだけ辛い思いしてたと思ってんの？ じっくりも、胸が潰れそうで。他の女の子たちの家族は、みんな楽しそうに暮らしているのに、なんでウチはこんななんだろうって。じっくりもじっくりも、ミジメで、ミジメで。

鉄山、月を見上げている。

亜伊 え？ 月？ 何でいま、このタイミング？

鉄山、去っていく。

亜伊、空を見上げて、

亜伊 ……ま、確かに、綺麗な月だけだ。

月に照らされる亜伊。

ふと、辺りを見回すと父の姿はもう既がない。

亜伊、また机に向かい。そして、また書き始める。

やがて睡魔に襲われて眠りに落ちる。
朝。

そこへ、編集者。

編集者 亜伊さん、亜伊さん、

亜伊 (起き上がって) はいはい。

編集者 鉄山先生が、鉄山先生が、

亜伊 ああ、昨日の夜、なんか来たけど。

編集者 え？ 鉄山先生、昨晚、お亡くなりになりましたけど。

暗転。

終章 愛を語らない

- 4 柴山鉄山の葬儀は、嘘のような晴れ上がった日に行われた。
- 1 目黒の自宅には、多くの著名な文人たちが弔問に訪れた。
- 8 棺には、父のトレードマークであった帽子と、私が書き散らした幾枚もの草稿が入れられて、一緒に焼かれた。
- 7 父の遺体は、本当によく燃えた。
- 5 父の人生そのものようだった。
- 6 骨壺に、ほんの欠片のようになった骨を納めながら、ああ、この人は、本当にあとには何も残さなかったのだなと思った。
- 4 しかし、私は一つ、灰の中に固いものを見つけた。

場面変わって。
葬儀の後、晴天の下。

亜伊 お疲れさまでした。

春子 ああ、亜伊さん。…あつと言う間だったわね。

亜伊 はい。

春子 これですっきり。

亜伊 はい。

春子 たくさんの人に見送ってもらって、幸せだったんじゃない。あの人も。あの人が、寂しがり屋だから。

亜伊 勝手放題やって、勝手なタイミングで死にやがって。

春子 書けそうなの？

亜伊 はい？

春子 書きたかったものは。

亜伊 ええ、まあ。とびきりの罵詈雑言を書いてやります。

春子 それは喜ぶわ。あの人が、なんだかんだで、あなたのこと、一番、心配してたから。

亜伊 いや、それはないでしょう。

春子 そんなことはないわ。…あの人は、なんでも書いてしまった。最初の奥さんのことも、私のことも、それから、そのあとの数々の不倫。心中事件。全部。

亜伊 はい。

春子 あの人が関わった、全ての女のことが、あの人の本を読めばわかる。

亜伊 困った人ですね。

春子 でも、一人だけ絶対に書かなかった女がいる。

亜伊 はあ、

春子 あなたのこと。

亜伊 ……

音楽。

春子 あの人は、あなたのことは、決して作品の題材にはしなかった。

亜伊 あ、

春子 本当に大事なことは、決して口にはしないのが、あの人だったから。

亜伊 ……

二人、空を見上げた。

やがて、

亜伊 これから、春子さん、どうするんですか。

春子 残されたもの、整理しないとね。

そこへ、編集者。

編集者 遺品の整理、私にも手伝わせてください。

亜伊 あ、そういえば、

亜伊、鍵を取り出す。

亜伊 ちょうど、帽子を焼いたあたりにありました。

編集者 鍵？

春子 ずっと、帽子に鍵を隠していたってこと？

亜伊 何を隠すことがあんの。今更。あ、

亜伊、思いつく。

4 そういえば、父の書斎のデスクには、鍵のかかった引き出しがあった。

5 文豪 柴山鉄山が、その引き出しに一体、何を隠していたのか。

7 私たちは、その机の引き出しを開けてみることにした。

亜伊、春子、編集者、書齋へ。

亜伊、鍵を引き出しに差し込んでみる。

そして、引き出しを開ける。

亜伊 あ、原稿……？

編集者 もしかして、柴山先生、未発表の原稿ですか。

春子 わざわざ、鍵をかけて。

亜伊、原稿を手取る。

息を飲む。

そして、その一枚目を読み上げる。

亜伊 「我は……、」

8 「八百屋の娘を」

1 「肉欲のままに彼女を畳の上に押し倒して……」

5 ……え？

別の原稿を見て、

亜伊 「女の、」

9 「女の肌の温もりを……」

4 タイトル

1 『春キャベツの戯れ』

間。

8 エ、

1 エ、

全員 エロ小説だ！

亜伊 うわあああああ！

編集者 うおー。興奮する……！！

亜伊、持っていた原稿を破り、

亜伊 この、クソ野郎！

編集 ああああああ、貴重な原稿が！

春子 きゃあああ、

亜伊、次々に原稿を破り、それを盛大にまき散らかす。
たくさんの原稿が舞う中、音楽とともに幕。

《参考文献》

- 柴山 亜伊 著 『父・柴山鉄山』 みすず文庫、一九八五年。
柴山 鉄山 著 『柴山鉄山全集』「一―三巻」信濃郷土出版社、一九七八年。
佐藤 文彦 著 『柴山鉄山と近代日本文学の潮流』明治書房、一九七四年。
趙 浩然 著 『柴山鉄山：未完の作品とロマンチズム』文藝書館、一九七二年。
川村 秀一 著 『鉄山の筆致：思想と表現の転換期』新潮文芸社、一九八二年。
藤井 健 編 『柴山鉄山書簡集：文豪の素顔』中央文庫、一九九一年。
山田 玲司 著 『昭和文学における柴山鉄山の位置付け』白鷗書院、二〇〇五年。
Michael G. Ponsy 著、井上京子訳 『柴山鉄山と日本モダニズム』国際文化社、二〇一三年。
木ノ戸茜 著 『月に吠える父』印知己出版、一九八〇年。
林美香 著 『大正ロマンが好き』文芸社、一九八九年。
高橋 葵 著 『モダンガールの夢』日本文化社、一九九四年。
鈴木 遼 著 『近代日本におけるモダニズム文学の展開：大正期の文芸潮流』青空出版、一九八七年。
林美香 著 『大正期における女性の表象』文芸社、一九九〇年。
篠原 拓夢 著 『ウタ子さんのゴンドラ』モカイコ文庫、二〇一六年。
高橋 葵 著 『自由と抑圧：大正期の文学における恋愛の変容』日本文化社、一九九四年。
鈴木 翔 著 『文学と歴史の狭間：大正期における文化のダイナミクス』未来社、一九九八年。

《用語解説》

柴山鉄山(本名芝山金太一八八六—一九三二)

松本市の造り酒屋に生まれる。旧制松本中学校から、東京帝国大学独文科へ進学(二年次中退)。在学中に小説家を志すが、父に猛反対されて勘当される。父と縁を切ったことで、筆名を芝山から柴山に変え、また自身の浪費癖を自虐して「金を失う山」との意で、「鉄山」と名乗る。代表作『断崖』『蒼穹に立つ』。鉄山の私生活は破滅的ときえ言えるものだったが、その生き方を通じて、狂気や絶望、愛と憎悪の狭間に立つ人間の姿を描き出し、彼を多くのスキヤンダルと、スリリングな事件の主役へと導いた。そしてそのすべてが彼の作品の素材となった。鉄山の浪費癖は、文壇でも伝説的なもので、稼いだ印税は酒と彼の借金の返済、浮名を轟かせた女性関係のもつれを解決するための「手切れ金」に消えていった。目黒にある柴山の自宅は、現在「柴山鉄山文学館」として保存されている。

柴山亜伊(本名芝山亜伊一九一三—一九九八)

小説家・エッセイスト。代表作に父親の人物像と家族としての葛藤を綴った回想録『父・柴山鉄山』がある。一九一三年、東京・目黒区の柴山家に生を受ける。幼少期から文人たちが集う家で育ち、自然と文学や芸術に親しむ環境にあった。戦後、文芸誌『女人の文学』に寄稿し、エッセイストとしての活動を開始。一九五五年、回想録『父・柴山鉄山』を出版してベストセラーとなる。一九七〇年代以降、評論やエッセイを中心に活動を続け、主に女性の社会進出や文学におけるジェンダー問題に鋭い視点を投げかけた。一九八二年に『父・柴山鉄山』を再版する際には、父・鉄山に宛てた書簡風の序文を付している。柴山鉄山文学館の設立にも多大な影響を与えた。

敷島

「敷島」は、日本のたばこ銘柄の一つ。日露戦争の翌年、一九〇五年に発売された。当時、日本国内で生産されていた紙巻きたばこで、初期の銘柄として人気を博した。「敷島」の名は、日本の古典である『万葉集』や『古今和歌集』などで「日本」を指す雅称「敷島の和」に由来しており、国産品としての誇りを示している。なお、煙草は「喫(の)む」ものである。

モダンガール

モダンガールとは、大正時代から昭和初期(主に一九二〇年代から一九三〇年代)にかけて、日本に現れた新しい女性のライフスタイルやファッションを象徴する存在。欧米文化や西洋的な価値観を積極的に取り入れ、自由な恋愛や自己表現を追求する姿勢が特徴。彼女たちは、ショートヘアや洋装(ドレスやスカート)を好み、当時の保守的な和風の女性像とは対照的な存在とされた。また、カフェやダンスホールに通い、都会的で活発なライフスタイルを楽しむ姿が注目された。

宇野千代(一八九七年—一九九六年)

日本の小説家、随筆家、そして着物デザイナーとして、戦前から戦後にかけて活躍した文化人。なお、宇野千代が洋装になったのは、一九三〇年代のことであるから、柴山フミが憧れた洋装は、実際には宇野千代のことではないかもしれない。

『断崖』

柴山鉄山の代表作『断崖』は、一九二九年に発表された長編小説であり。物語は、主人公が複雑な愛憎に絡み取られながら、愛する

女性と心中を試みるも、最終的に破局と絶望に至るまでの過程を描く心理劇となっている。作品全体に漂う暗く重苦しい空気、主人公の壊れていく精神と、そして愛と死を巡る深い問いかけが特徴的である。

物語は、主人公・香川武郎が東京の小さな喫茶店で、謎めいた女性・三崎弓子と出会うところから始まる。武郎は妻・典子と平凡ながらも安定した家庭を築いていたが、彼自身の心は常に「死と愛の境界線」に引き寄せられていた。そんなとき、ふと立ち寄った喫茶店で弓子の妖艶な魅力に取り憑かれた彼は、彼女との危険な恋にのめり込んでいく。弓子は、初対面の武郎に対して「貴方も、あの断崖の夢を見た事がお在りになるのでせう？」と意味深な言葉を投げかける。武郎は、その言葉に導かれるかのように、次第に弓子との心中の計画を練り始める。クライマックスでは、武郎と弓子は波音が響く崖の頂に立ち、「これで僕たちは一つと成る」と囁くが、武郎の心の奥底の裏切りに気づいた弓子は、一人、身を投げるように崖下の海へと身を沈めていく。武郎は弓子の姿が波間に消えるのを見送り、「僕は矢張り、生きる事に執着してしまつた」と呟き、断崖の縁に座り、震える手で煙草に火をつけ、暗闇の中でぼんやりと燃える火を見つめるのだった。心中をテーマにした物語は当時の日本社会においてセンセーショナルな題材であり、鉄山の作品は「死を美化している」と批判される一方で、その深い心理描写と愛と絶望の緊張感に「これぞ近代文学の到達点」と称賛する声も多かった。

森鷗外（一八六二年—一九二二年）

明治大正期の小説家、詩人、評論家、医師。代表作に、『舞姫』『うたかたの記』『高瀬舟』など。なお本作のセリフにある「世に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず」は、『舞姫』にて、主人公が教会の入り口で泣くエリスと出会った際の記述による。

月が綺麗ですね

夏目漱石が英語教師をしていた際、生徒たちが「Love you.」を「我君を愛す」や「僕は、そなたを、愛しう思う」と訳したが、それ聞いた夏目漱石は、「日本人はそんなことを口にしない。『月が綺麗ですね』でも訳しておきなさい」と言ったとされる。ただしこの逸話は、出典が明確ではなく、フィクションの可能性が高いと思われる。

芥川龍之介の恋文

芥川龍之介が、塚本文にあてた恋文には、芥川のまっすぐな恋の言葉が綴られている。「貰ひたい理由は、たつた一つあるきりです。さうして、その理由は僕は、文ちやんが好きだと云ふ事です」と綴られている。なお、本作では、「この頃ボクは文ちやんがお菓子なら頭から食べてしまいたい位可愛い気がします」から作られた台詞が用いられている。

趙浩然（ちようこうぜん 一九〇八—一九七二）

趙浩然は、昭和初期に活躍した中国出身の編集者であり、柴山鉄山の代表的なパートナーの一人だった。一九〇八年 上海の名家に生まれる。幼少期から中国古典や詩文に親しみ、卓越した語学力を培う。東京帝国大学に留学し、文学と哲学を学び、この時期に柴山鉄山の作品を知る。大学在学中に文芸雑誌『新文藝』の編集助手として活動し、『暗夜の囁き』の出版に際し、柴山の担当編集者となつて以後、二人は交流を深める。『蒼穹に立つ』は、鉄山と趙の逃避行をモデルにしたものとする説もある。鉄山の死後、鉄山の遺稿の整理などを行っていたが、一九四一年の日中戦争の激化に伴い、趙は日本政府から監視対象となり帰国を余儀なくされる。戦後 中国国内で翻訳家・評論家として活動し、中国文学の発展に寄与した。一九七二年に上海で没し、彼の遺品の中には、柴山から贈られた万年筆が残されていた。

那須塩原

栃木県北部の都市。那須塩原温泉は、数々の文豪たちに愛された。また一九〇八年三月、森田草平と平塚明(らいてう)が駆け落ちし、心中未遂事件をおこす。また一九三〇年、柴山鉄山も女学生と逃避行して心中未遂事件を起こしている。柴山鉄山の『福寿草』はこの時のことを小説にしたもの。また尾崎紅葉は、那須塩原温泉にて『金色夜叉』を執筆しており、作中には、旅館で心中する男女が登場する。

柴山鉄山文学館

柴山鉄山文学館は、鉄山の足跡を顕彰するため、目黒区の自宅を改装し、一九九五年に設立された施設。鉄山の文学活動や人間性を広く伝えることを目的とし、彼の生涯や作品に触れられる貴重な文化拠点となっている。文学館の建物は、彼が生涯を通じてこだわった和洋折衷の意匠を反映しており、モダンさと伝統美が融合したデザインが特徴。特に鉄山の創作の場として知られる書斎「静思閣(せいしかく)」は、設立当時の様子を忠実に再現し、彼の書齋机や執筆道具がそのまま展示されている。

主な展示内容は、原稿・草稿の展示、同時代の文豪、谷崎潤一郎や志賀直哉との往復書簡、さらには彼の弟子や編集者に宛てた手紙も展示されている。また、彼が愛した眼鏡、葉巻ケースなどの遺品も展示され、鉄山の生活の息吹を感じさせる。柴山鉄山文学館では、彼の作品に関する講演会や、文学のワークショップ、特別展を定期的に開催し、来館者との交流を通じて彼の文学世界を広く紹介している。

柴山フミ

柴山フミ(旧姓:西崎)は、柴山鉄山の最初の妻であるが、鉄山が文壇で注目され始めると、鉄山の女性関係は一気に奔放なものとなり、二人の関係は急速に冷え込んでいった。フミもまた東京帝国大学の学生の川本隆司と不倫関係に陥り、家庭を捨てることとなる。フミはその後、川本と共に京都に移り住み、短期間ながらも新しい生活を始めたが、二人の関係は長続きせず、一年も経たないうちに破局を迎えた。彼女は晩年、テレビ番組の取材に応じており、鉄山の妻として生きた年月を「地獄だった」と振り返りながらも、「あの人はどこか、人を引きずり込む深い淵のような人だった」とも語っている。

活動写真

日本における映画の初期の呼び名で、主に明治末期から大正時代にかけて使われていた。英語の「moving pictures」を翻訳したものが語源。活動写真が日本に初めて紹介されたのは、明治三十年(一八九七年)頃のこと。最初は欧米からの輸入映画が主流だったが、次第に国内でも映画製作が行われるようになり、大正時代には日本独自の映画文化が形成されていった。初期の活動写真は、現在の映画に比べると非常にシンプルで、音声がなくサイレント映画が主流であった。映画館では、「活動弁士」というナレーターが映像に合わせて物語を説明し、台詞や情景の解説を行う。トーキーが一九二七年にアメリカで初めて登場し、日本でも昭和初期にかけて音声付き映画が普及すると、活動写真という言葉は次第に使われなくなり、「映画」という言葉が一般化していった。

不思議の国のアリス

イギリスの作家ルイス・キャロル(本名:チャールズ・ラトウィッツ・ドブソン)によって一八六五年に発表された児童文学。少女アリスが、

不思議な生き物や場所が存在する夢のような世界「不思議の国」を冒険する物語。日本でも、明治期より翻訳された。一九二七年には菊池寛と芥川龍之介の共訳による『アリス物語』が刊行されている。

月の光

ドビュッシーの「月の光」(Clair de Lune)は、彼のピアノ曲集『ベルガマスク組曲』の第三楽章として知られる作品。原曲は一八九〇年に作曲され、一九〇五年に改訂された。印象主義音楽の代表的な作品の一つであり、ドビュッシーの詩的な音楽性が色濃く表現されている。

※この物語はフィクションです。柴山鉄山は実在しませぬ。

『愛を語らない』の上演をご検討いただいている皆さまへ

- ・上演に際しましては、必ず「上演許可」の申請をお願いいたします。
- ・舞台創作の過程でのセリフの改変は、基本的には自由に行っていただいて構いません。
- ・本作のセリフの中には、センシティブな表現を含むものもあります。取り扱いについては、上演団体の責任においてお願いします。
- ・柴山鉄山の編集者が中国人であった、という設定は、座組の中に中国語話者がいたために取り入れた創作です。必ずしも中国人である設定は必要ではありません。適宜、改変してください。